

平成 26 年 3 月

佛乗寺檀信徒の皆様へ

佛乗寺住職 笠原建道  
総代 廣田正至

ことのほか厳しかったこの冬でしたが、夜明けも早くなり、朝日にも春の力強さが感じられる季節となりました。

檀信徒の皆さまには、冬ごもりから抜け出して、澆刺とした活動に向かっての準備に怠りないことと拝察いたします。

さて、まもなく彼岸会を迎えます。彼岸は「彼岸」、つまり向こう側の意であり、こちら側としての「此岸」があります。悩みや苦しみの心を「此岸(煩惱)」といい、悩みや苦しみから解き放たれた心の状態を「彼岸(覚り)」として、海や川の岸に譬えた言葉です。この悩みや苦しみの大海を渡り、明るく楽しい「彼岸」に到達する方法を学び実践するのが仏法です。

日蓮大聖人は、『椎地四郎殿御書』で、

妙楽大師の云はく「<sup>い</sup>っくも<sup>たましい</sup>神に染めぬれば<sup>ことごと</sup>咸く<sup>ひが</sup>彼岸を<sup>たす</sup>資く、<sup>しい</sup>思惟<sup>しゅうじゅう</sup>修習<sup>なが</sup>永く

<sup>しゅうこう</sup>舟航に<sup>ゆう</sup>用たり」云云。生死の大海を渡らんことは、妙法蓮華經の船にあらずんばかなふべからず。  
(御書・1555頁)

と、中国の妙楽大師が、法華經の教えを覚りに向かう船に譬えて説かれていることを引用され、私たちがこの娑婆世界の、悩みや苦しみの大海を渡ることができるのは妙法蓮華經の御本尊様の信仰に限ることを教えられます。

舟にも大きな舟と小さな舟があります。大きな舟であれば、荒れ狂う大海に向かって漕ぎ出したとしても、多少の揺れはあるものの目的地に到着することができます。幸いにも私たちは過去世からの善き縁により、御本尊様、つまり「大きな舟」に乗っております。まことに有り難く貴いことです。

日蓮大聖人は、ここに挙げました『椎地四郎殿御書』にも述べられるように、お経文に説かれ、その経文を天台や妙楽が解釈したものを用いて私たちに仏法の正しい筋道を説き示し、「彼岸」に導いて下さいます。

この日蓮大聖人の教えを信じ、自らの幸せと周りの方々の幸せを祈る、日蓮正宗富士大石寺の御信心に励みましょう。

檀信徒の皆さまの益々のご精進とご健勝をお祈り申し上げます。